

平成 26 年 4 月 24 日現在

機関番号：37503

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520885

研究課題名(和文)『遼史』の再構築 契丹文墓誌を主資料として

研究課題名(英文) A Reconstruction of the Liaoshi, based principally on Khitai epitaphs

研究代表者

吉本 智慧子 (YOSHIMOTO, Chieko)

立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・教授

研究者番号：70331105

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、漢文史料にもっぱら依存した従来の研究の限界を超え、『契丹文墓誌より見た遼史』(松香堂、2006年)公刊後出土の契丹文墓誌を主資料として、『遼史』の全面的な校勘整理に対する堅実な基盤を作り上げることを目的とする。契丹文墓誌を全面的に活用した契丹(遼)史の再構築は、前人未踏の領域を開拓するものとして、大きな意義をもつ。3年間の着実かつ豊富な契丹文字研究の成果を踏まえ、考古学的現地調査を加えたうえ、『遼史』世表・皇族表・外戚表並びに官衛志、百官志・列伝の一部の再構成を達成した。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research project is to exceed the limitations of earlier studies that depended solely on Chinese materials and to establish a concrete basis for a comprehensive revision and textual reorganization of the Liaoshi, mainly based on Khitai epitaphs excavated after the publication of the head investigator's book, The Liao History as Seen from Khitai Epitaphs(Shoukadoh, 2006). The reconstruction of Khitai-Liao history using Khitai materials to their fullest extent has great significance in reclaiming a previously untrodden domain of history. Based on concrete and substantial result of three years' research project, as well as archaeological fieldwork, the head investigator has achieved to reconstruct the Shibiao, Huangzubiao, Waiqibiao, parts of the Yingweizhi, Baiguanzhi, and biographies of the Liaoshi.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：遼史 契丹文墓誌 漢文墓誌 契丹大字 契丹小字 遼朝皇族帳 遼朝国舅帳 契丹遙輦可汗

1. 研究開始当初の背景

10 世紀に遼朝を建国し、200 年余りにわたってユーラシア東部に覇権を唱えた契丹の歴史的研究は、「満蒙史」の一環として、戦後初期までの日本において豊富な研究蓄積をもち、K.A.Wittfogel は、馮家昇との共著 *History of Chinese Society, Liao, 907-1125*(1949)において conquest dynasty の概念を提出し、その嚆矢として、遼朝の中国史上における画期的役割を評価した。その後、研究は久しく停滞したが、1970 年代以降、ポスト=モダンの思潮において、13 世紀におけるモンゴル帝国のユーラシア制覇に「世界史」の成立を認める言説が一般化し、さらに近年では、モンゴル帝国の原型として遼朝の歴史的役割への関心が高まっている。しかしながら、契丹史研究は一般にはなお立ち後れた状態にあると言わざるを得ない。その原因は、第一に、契丹文字がほとんど解読できないため、第一次資料である契丹文墓誌が利用し得なかったこと、第二に、契丹文墓誌を利用し得ないため、それとの対照において、同じく第一次資料である漢文墓誌の偏向を認知し得なかったことにある。第三に、最も主要な文献資料である『遼史』の分量が乏しく、また錯誤に満ちていることにある。契丹文墓誌は 1920 年代以降持続的に出土しているが、その総量はなお乏しく、かつ解読が難解なため、契丹史研究の史料としてはほとんど利用されてこなかった。本来、研究の主導的役割を果たすべき中国における契丹文字研究は、必ずしも研究水準の高くない特定の少数研究者のみが従事しており、また研究資料の「死蔵」や先行研究への尊重の欠如、甚だしくは研究成果の盗用などが常態化し、研究は停滞状況にある。日本や英語圏などの一般の研究者はこのあたりの実態を十分には認知せず、中国学界の「研究成果」に無批判に追随しており、研究の真正の発展は到底期待できない。

研究代表者は長年、契丹文字のほか、女真文字やアルタイ言語学の方面においても研究を蓄積し、とくにここ 10 年は日本学術振興会などの研究助成を受けて、契丹文字研究を集中的に進め、現時点までにすでに契丹小字の 90%、契丹大字の 80%の音価を復元し、あわせて数多くの契丹語の単語の意味を推定している。このように、歴史言語学的に現時点で能う限り正確な契丹文字の解読を前提に、契丹文墓誌を史料として運用するという、先人未踏の領域を開拓しつつある。前著『契丹文墓誌より見た遼史』(松香堂、2006 年)はその研究成果の一部である。同書は、2006 年夏までに出土した 30 件の契丹小字墓誌と 10 件の契丹大字墓誌をもとに、契丹諸氏族の構成と変遷、遼朝皇族・后族における諸房帳の形成、契丹文化史上の諸問題を論じたことで、漢文史料の限界を超えて、契丹文明の全貌及び

その内部に具有された多彩で活力のある隣接文明の要素を解明した最初の試みである。その後、新資料の出土が持続しており、引き続き収集・解読することは、契丹史に遺された諸問題の解明に、必ずやより多くの成果をもたらすことが期待される。

2. 研究の目的

契丹文墓誌の解読を運用すれば、契丹史の一般的理解において無批判に受容され、重要な前提となっていた『遼史』の記述に深刻な錯誤や遺漏があることを知る。代表的なものを例示しておこう。第一に、皇子表・公主表・皇族表・外戚表については、全面的な再構築が可能である程度に錯誤が甚だしい。中華書局の校勘記は、本紀・列伝の記述を根拠として各表における誤脱・重複・世代の混乱などの錯誤をすでに数カ所指摘しているが、墓誌の記述と照らし合わせれば、訂正や補充すべき箇所は数倍に増え、校勘記にさえ少なからぬ錯誤があることが確認される。第二に、遼朝の横帳・国舅帳は遼一代を通じて独自の変遷をたどっているが、その過程は『遼史』には窺えない。百官志・營衛志の説明は異なった時代の事象を混淆しており、その一方で、契丹文墓誌には天祚帝期に至っても見出しえないような意味不明の名称変更を記している。第三に、建国前の遼輦氏及びその後裔に関する記述は『遼史』では極めて簡略だが、新出契丹文墓誌には、「遼輦世家」を立てるほど豊富な資料がある。本研究の目的は、契丹文墓誌・漢文墓誌・『遼史』など漢文史料の関連記述を全面的に対比・評価し、『遼史』の局限を超える契丹人の歴史の実像を復元するための研究基盤を提供することにある。言語学と歴史学、契丹文字資料と漢文史料の分断状況を克服し、超域的史学研究の方法論を構築し、21 世紀に相応しい歴史研究の新機軸が定礎されよう。

3. 研究の方法

本研究では、2006 年以降新出の墓誌資料を中心に、内モンゴリア東部・遼寧省西北部・河北省北部における現地調査・資料収集を進め、収集しえた契丹文墓誌の字形を鑑別して電子化する。ついで、全面的に解読して翻訳を作成し、記述内容に詳細な注釈を施し、正史その他の漢文史料及び漢文墓誌の記述との比較研究を進める。ついで収集しえた漢文墓誌を電子化し、正史その他の漢文史料及び契丹文墓誌の記述との比較研究を進める。以上の作業を基礎として、『遼史』の関連する志・表・列伝の全面的な検討、再構築を行う。

4. 研究成果

[平成 23 年度] 平成 23 年度においては豊富な新出資料に恵まれ、大量の未解読単語が一斉に解読できるようになり、単語の解読

が文法認識の深化につながった結果、長編の資料翻訳が可能となった。こうした成果を遼史研究に全面的に運用した成果の一端として、『韓半島から眺めた契丹・女真』（吉本道雅と共著。京都大学学術出版会、2011）を刊行した。この書物では、いままで解明されなかった遼史と高麗史に記述される契丹人の多数の系譜を解明し、契丹文字研究史上初めて韓国国立博物館所蔵の銅鏡銘文を解読し、いままでさまざまに誤釈されてきた突厥碑文の *čolgi* が実際には契丹語 *šulwur* の同源語であり、新羅を指すことを確認し、テュルク学にも絶大な寄与を遂げた。

[平成 24 年度] 平成 24 年度においても豊富な新出資料に恵まれ、契丹大小字の音価推定及び契丹語文法再建の深化が達成され、契丹文に現れる契丹人自身の歴史認識を一層深く理解できるようになった。こうした成果を遼史研究に全面的に運用した成果の一端として、『新出契丹史料の研究』（吉本道雅と共著。松香堂、2012）を科研費学術成果公開促進費（学術図書）によって刊行した。この書物では、『契丹文墓誌より見た遼史』公刊以降出土した 7 件の契丹文墓誌と 9 件の漢文墓誌に全面的な翻訳・研究を施すことによって、遼朝成立以前の契丹部族連盟の構成及び建国後の皇族帳と国舅帳の実態、とりわけ遙輦氏と耶律氏の発祥地とされる陶隈思迭刺部の形成過程について多数の史実を解明した。それによってもたらされる豊富な新知見は、契丹（遼）史のみならず、広く東ユーラシア各民族史を対象とする研究にも大きく裨益するものになると言える。

[平成 25 年度] これまでに実施した契丹に関する歴史学的作業に基づき、新出考古学的資料と関連文献の記述を比較検討し、前年度に収めた研究成果に引き続き、『遼史』の列伝に重点を置いてその再構築に取り組んだ。中国内蒙古自治区敖漢旗人民政府及び敖漢旗博物館・新州博物館の協力で、日中合同「契丹発祥地の考古学的調査研究」を組織し、契丹遙輦可汗の本帳所在区域を 4 回にわたり調査し、豊富な収穫を収めた。これまでに実施した契丹に関する言語学的作業に基づき、新出契丹文墓誌の解読・翻訳を進め、契丹大字 1028 字（異体字を数えない）の内 839 字、契丹小字 345 字（異体字を数えない）の内 310 字の解読を達成した。現在までに発見された契丹大字墓誌 16 件と契丹小字墓誌 43 件の原文をローマ字に転写したのち、対訳・意識を附することで、『契丹大小字墓誌全釈』という膨大な研究成果が獲得された。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 15 件）

1. 吉本 智慧子、元代女真大字新資料、近世東亜国際学会論文集、査読無、2013、pp.1-12.
2. 吉本 智慧子、契丹小字新発見資料の釈読及び相關問題、立命館文学、査読有、632、2013、pp.1-36.
3. 吉本 智慧子、平泉県出土『六節度国王延寧之夫人耶律乙里婉墓誌銘』研究、中国契丹文化研究会論文集、査読無、2013、pp.1-8.
4. 吉本 智慧子、契丹文字に遺された「秘史」、立命館文学、査読有、633、2013、pp.16-62.
5. 吉本 智慧子、契丹文字石刻解読の新成果、*Altaic Studies: On the 80th Anniversary of Professor SEONG Baeg-in*, Seoul National University. 2013. pp.339-404.
6. 吉本 智慧子、阿爾泰学的重要基石—女真語言文字研究、金上京文史論叢、査読有、2013、pp.1-6.
7. 吉本 智慧子、蕭秘墓誌考、東亜文史論叢 1、査読有、2012、pp.1-12.
8. 吉本 智慧子、契丹小字の音価推定及び相關問題、立命館文学、査読有、627、2012、pp.1-29.
9. 吉本 智慧子、契丹小字『烏隗烏古里部宸安軍節度使兀古隣太師墓誌銘』、契丹言語文化研究センター紀要 2、査読無、2012、pp.27-46.
10. 吉本 智慧子、契丹大字『大フリジ契丹国六院休堅大王位誌』、契丹言語文化研究センター紀要 2、査読無、2012、pp.1-26.
11. 吉本 智慧子、特里堅審密墓誌と蒲奴隱尚書墓誌、東亜文史論叢 1、査読有、2011、pp.1-28.
12. 吉本 智慧子、契丹女子の姓名習俗、北方文化研究、査読無、2011、pp.35-52.
13. 吉本 智慧子、契丹横帳孟父房耶律思齊與高麗大覚国師義天、遼金史国際学会論文集、査読無、2011、pp.1-9.
14. 吉本 智慧子、蕭撻覽與国舅夷離畢帳、遼代歴史與考古国際学会論文集、査読無、2011、pp.439-451.
15. 吉本 智慧子、蕭德順妻墓誌考、東亜文史論叢 2、査読有、2011、pp.68-76.

〔学会発表〕（計 4 件）

1. 吉本 智慧子、契丹発祥地進一步深入論証の必要性、中国第二届契丹文化研讨会、中国平泉県人民政府（中国平泉県）、2013.8.18.
2. 吉本 智慧子、元代女真大字新資料、近世東アジア・満洲文化国際学術会議、高麗大学（韓国ソウル）、2013.5.3.
3. 吉本 智慧子、蕭撻覽與国舅夷離畢帳、遼代歴史考古国際会議、遼寧省博物館（中国瀋陽市）、2011.9.15.
4. 吉本 智慧子、契丹横帳孟父房耶律思齊與高麗大覚国師義天、遼金史国際会議、吉林大学歴史学院（中国長春市）、2011.8.11.

〔図書〕（計 3 件）

1. 愛新覺羅烏拉熙春（吉本智慧子）・吉本道雅、新出契丹史料の研究、松香堂、2012 年、255

頁。

2. 吉本 智慧子、契丹語諸形態の研究、東亜歴史文化研究会、2012年、256頁。

3. 愛新覺羅烏拉熙春（吉本智慧子）・吉本道雅、韓半島から眺めた契丹・女真、京都大学学術出版会、2011年、280頁。

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

1. 契丹学・女真学・満洲学

<http://www.apu.ac.jp/~yoshim>

2. 契丹語・契丹文字研究の新展開

<https://sites.google.com/site/kitangokitanmojikenkyu/home>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉本 智慧子 (YOSHIMOTO, Chieko)

立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・教授

研究者番号：70331105

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：